

登山学校レポート（第3回講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡アゼリア山の会）

問1 遭難追想の日講演会に参加して、所属会のリーダーを目指す立場として何を考えたか

今回の講演会で、講師のお二人（福岡県連・吉永直樹理事長／「星と焚火」木下育美さん）のお話を聞いて私が心に刻んだのは、①山の事故をゼロに近づけるためのキーワードは「ギャップを埋める」ではないか ②リーダーが背負う役割という荷物は「本当に重い」一の2点だ。

まず、①について。吉永理事長が、佐賀労山のメンバー1人が八ヶ岳（天狗岳）で亡くなった死亡事故（2022年1月17日発生）の報告書概要を説明。それによると、当日の行動は出発時を含め時間遅れがどんどんひどくなり、13時着予定の東天狗岳に16時20分に到着（宿泊する黒百合ヒュッテ着の予定は14時半）した時点で遅れが3時間20分に達し、辺りは暗くなり始める異常事態だったようだ。この後、ヘッドランプ装着での行動→ルートを見失う→岩陰でのビバーク→低体温症により死亡、という最悪の結果となった。

単に「計画の甘さと現場でのリーダー判断ミス」と括るだけでは済まない、と思った。

計画立案時点で、ルートの難易度とメンバーの能力・経験が釣り合っていなかった（ギャップがあったのに計画を修正しなかった）ことが最初に考えられる。さらに、計画したタイムスケジュールと山中での行動タイムの間に大きなギャップが生じている。これが何によるものか分からないが、リーダーはこのギャップをスルーし、計画通りの行動を続けようとしたと映る。後者の場合、ギャップを直視し、プラン修正の柔軟性を持ち合わせていれば、事故は防げたのではなかったか。

佐賀労山の事例の教訓も含め、「事故をゼロに近づけるため」に吉永理事長が提起した内容は、②にも直結する話だが、これから山行リーダーを務めることになる身として示唆に富むものだった。具体的には、『総合登山技術ハンドブック—夏季アルパイン』（国際山岳連盟などがまとめた技術書の日本語版）からの、以下のような引用箇所だ。

「状況を徹底的に確認してから判断する。必要十分な情報を得て、判断をくだす前に情報を時間をかけて吟味する。状況確認と判断決定を同時に行うと、よくない選択をしてしまいがちになる」

現場では、つかめる情報を全てつかんだ上で、一度落ち着いて冷静になり、俯瞰的に考えを巡らせてから最終判断を下すことを勧めている。果たして今の自分にそれができるだろうか。

「パーティーにリーダーが何人か存在するとき、あるいは技術レベルが同じメンバーが複

数存在すると（中略）、みんなの責任は無責任という状態に陥り」「リーダーは、危険を避けるために、不評だとしても、友好的なムードを壊したくないという圧力に逆らわなければならない」

例えば、主峰の山頂まであとわずかなのに撤退を決断しないとイケない場面に、リーダーが直面する。メンバーからの反発や不信が予想される。それでも、事故を回避させるために必要な判断と確信したら、毅然と伝えないとイケないのだろう。もちろん、事前にメンバーから意見を聞くこと、最終判断の理由を丁寧に説明するといったメンバーシップを守りながら。

福岡県連での事故が相次ぎ、危機感から2014年にこの登山学校を立ち上げた中心人物である木下さん。「事故を1件でも減らす」ことへの思いと取り組みの軌跡を、2時間にわたり熱く語ってくれた。

初めに、1997年から2016年までの間に県連で起きた死亡事故18件（23人）の1件1件についての説明を聞いた。いつどこで、どんな事故が、どんな状況で起きたかを知ることの大事さを改めて感じた。同じ過ちを繰り返さないために。

最後に話された、「リーダーは、ほんとに大変。メンバーの命を預かっているということ、まず思ふべきだ」という言葉がとても重く響いた。リーダーは、気象、ルート、地形、山行時間の管理、装備のこと、メンバーの個々の体力やメンバー同士の関係性など、多くのことを考えながらメンバーを引っ張らないとイケない。それだけでも大変なのに、「命を預かる」重責を言われると正直気が遠くなる。どんなスーパーマンなら務まるんだ…。

しかし、考えた。そうした“見たくない現実”をストレートに発してまで木下さんが伝えたかったのは、「覚悟のあるリーダーが育たないと事故はなくなる」というシビアな現実なのかもしれないと。

問2 登山学校生として今日の講演を受けたうえで、今期登山学校で学習したいと考えた項目

●山でのあらゆる想定を凝縮させた「山行計画書」の作り方と共有の仕方

吉永理事長、木下さんのお話に通じて出てきたのが山行計画書の重要性だった。

計画段階でタイムリミットをいくつか設定しておき、その時間で目標ポイントまで到達していたら予定通り、達してなかったらプランBを選ぶ、といったことを計画する。いろんな想定、シミュレーションが必要だ。吉永理事長は毎回の山行計画で実践されているようだが、自分はする時としない時があったことに気づいてハッとなった。

また、木下さんのお話の中に、計画書をパーティー全員で議論し、全員が中身をしっかり理解しておくことの大事さもあった。所属している山の会では、リーダーが山行計画をHPや毎月の会報に載せ、エントリーしたメンバーは計画書を見て概要をつかむ。少なくとも日

帰り山行で事前の打ち合わせは行われていない（と思う）。そうすると、「リーダーの〇〇さんに連れて行ってもらう山行」という心理状態や受け身の姿勢に陥りやすいのではないか。

思えば、学生時代に所属していた山スキー部では、リーダーは計画書を山行審議会に提出して問題点の指摘を受け、差し替え計画書を出し直すのは日常的にあった。審議会をパスしたら、全メンバーが膝を突き合わせてリーダーの説明を受け、メンバーもその場で質問し疑問点を解消していた。そこには緊張した雰囲気があった。生きた計画書、つまり事故の可能性を最小限にする計画書というのは、そこまで手間をかけないと完成しないのではないかと、自問自答している。

その意味で、「山行計画書作りのポイントと山行前の事前共有の仕方」について、他の山の会がどうやっているのかを含め、学びたい。

登山学校レポート（第三回講習）

氏名（横山淳子）・所属会（アゼリア山の会）

第三回講習では遭難追想の日講演会に参加し、県連の吉永理事長、木下育美さんから山の事故の現状と登山学校立ち上げ、活動について話を聞く事が出来た。

登山人口は減っているが事故は増加傾向である。

原因の一つは登山者の高齢化によるものである。

20代の体力を100%とすると60代では50%になる。またバランス力は60代は20代の20%との事である。自分の認識と実際とのズレがあり、それが事故につながる。体力年齢測定会では数値で体力が評価され自分の体力を客観的にみる事が出来る。

今まで登山中の事故は法的責任は問われなかったが、法的闘争になることがある。

事前にメンバー同士、家族共にリスクを共有する必要がある。「こんなはずじゃなかった」とならない為に。

リーダーはメンバーの命を預かっているという意識を持つ。リーダーとして必要な事は気象をよむ、地形を知る、メンバーの体力を知る、メンバーの関係性を知る、時間を考える、装備について知る。

事故回避にはどうすべきか。

- ・計画、山行中、シートを使用し客観的な評価をする。
- ・下山後の反省を行う。
- ・事故の分析を行う。
- ・危険箇所はロープを出す。
- ・全員がGPSソフト（YAMAPなど）を使いこなし、ココヘリを持つ。
- ・メンバーシップパートナーシップを育てる。
- ・自分の体力を過信しない。山を甘くみない。
- ・会でリーダー格の方が全員登山学校に入ると会全体が変わってくる。

私はこの研修を受け事故ゼロを目指すには、自分自身の山の実践が大切だと思った。いろいろな山を経験し登山学校で学んだ事と実践をつなげていきたい。今はクライミングなど新しい挑戦が出来る恵まれた環境にあり周りの方々にも感謝したい。まずはYAMAPを使いこなせるようになり、ココヘリを導入したい。そして受け売りの知識ではない安全登山についての情報を会に広げていきたい。また医療現場、介護、保育園など様々な所でハインリッヒの法則を取り入れ、インシデントレポート、アクシデントレポートなどを作成しているが登山でも取り入れられると思う。特にクライミングには事故防止に有効だと感じた。また木下さんの活動をお聞きし、山の自然を守る事が安全登山に繋がると感じたので、今後自然保護活動にも参加していきたい。

これから学んでいきたい登山学校での項目としては、メンバーシップ、パートナーシップについて理解を深めていきたい。